1 Ｔｒａｃｋ０２：『……おちんちん、見てみたいな』

……あれから少しひとりで考えてみたけど、
じっとしていられなかった。

姉貴がわざわざ俺の部屋に来て仕事の話をするのは、
真面目に悩んでる時だ。

前から台本チェックの際は、主人公のセリフを担当して、
手伝ったりもしていた。

そういった形でも、
姉貴を助けてあげることはできるかもしれない。

「『……お願い、ゴムつけて？　今日は危ない日なの。
……だ、ダメだってば生はっ』」

ドアをノックしている途中で、過激なセリフが耳に入ってくる。

できるだけ平常心で、姉貴の反応を待った。

「……あ、はーい！　ちょっと待ってね……よいしょっ。
……どうぞ～？」

「あ……邪魔しちゃってごめん……」

相変わらず薄着の姿が視界に飛びこんできて、
続けるべき言葉を失う。

意識しすぎなのはわかってるけど……

童貞には、少し……どころではない、刺激的な格好だった。

「台本のチェックで、色々散らかっててごめんね。適当に座って？」

部屋の中に案内されて、近くのベッドに腰を下ろす。

誕生日にプレゼントしたアロマディフューザーの活躍で、
入った瞬間、心地良いシトラスの香りがした。

台本のチェックをする時の、
お決まりのエッセンシャルオイルだ。

「あ……」

気分を落ち着かせながら足元に目を落とすと、
絨毯の上に、ピンク色の物体を見つける。

それはモロに男性器の形をしていて、
思わず、ガン見してしまった。

「……ああっ、これは違うのっ。ちょっとお口の演技で、いい音が出せないかなと思って研究中で……」

お口の演技というのは、
要するにゲームの中でのフェラチオの音だ。

指や手の甲を使って鳴らすのは知っていたけど……

……まさか、実際にアレをおしゃぶりして、
音を出してたのかな。

チラッと姉貴の口元が目に入って、
よからぬ妄想が浮かんでしまった。

**「作り物なのに、結構グロテスクで驚いたでしょ？
お姉ちゃんも、ディルドなんて買ったの初めてだから、
なんか持て余してて……」**

**「あ……もちろん、他のことには使ってないよ？
男の人ともしたことないのに、最初の相手がこんな……
シリコン素材のだなんて悲しいし……」**

そう言って、姉貴は恥ずかしそうにディルドを
両手で握りしめる。

本当に造形がリアルすぎて、
色以外は、実際の男性器と変わらないように見える。

**「……なんか、弟が相手でも、こういうの見られると
恥ずかしいね。さっきからすごい顔が熱いもん……」**

パタパタと手のひらで顔を仰ぎながら、
姉貴も気まずそうにしている。

でもそのぐらい仕事に対して真っ直ぐで研究熱心なのは、
弟の俺が一番よくわかっていた。

だから、茶化したりする気にはならないし、
姉貴がディルドを他のことに使っているとも思わない。

「それでどうしたの？　お姉ちゃんに何か用事……？」

「いや、えっと……」

**「……なになに？　そんな恥ずかしそうにして……
もしかして、恋の相談とか？」**

急に顔を覗き込まれて、カラダがビクンと跳ねる。

近くで見ると、姉貴はとにかく肌がキレイで、
触らなくてもスベスベなのがわかる。

**「照れてないで聴かせてよ。お姉ちゃんなりに、
何かアドバイスできるかもしれないし……」**

「あと最近、目を見て話さないのはなんで？」

その、ぷるんぷるんなおっぱいのせいだよ！！！
とか、開き直れたらどんなに楽だったか。
融通が利かない、なんでも真に受ける、ユニークさがない、
残念ながら、すべて俺たち姉弟に当てはまることだった。

「……ほら、ちゃんと顔をこっちに向けて？」

「う……」

両手で頬を挟まれて、ぐいっと顔を持っていかれる。
超至近距離で視線が合って、息が臭くないかとか気になって、
数秒間、呼吸を止めてしまった。

**「ふふっ、このまま睨めっこする？　そっちが負けたら、
お姉ちゃんの言うことをなんでも聴くってのはどう？」**

「ていうか、もう笑ってるじゃん。はい、お姉ちゃんの勝ち～」

笑うしかなかった。
自分の姉が、あまりにもかわいすぎて。
もし姉貴に彼氏ができたら、ガチで落ちこむ自信がある。
かわいすぎて負ける睨めっこなんて、生まれて初めてだった。

**「罰ゲームとして、おちんちん見せてもらっちゃおうかな～？
……なんてウソウソっ。お姉ちゃんちょっとしつこいよね」**

近くに投げ置かれていた、研究用のディルド。
真面目な姉貴が、俺に秘密でアダルトグッズを通販購入するのに、
どれだけ覚悟が必要だったか。
そして、細かくペン入れがされたゲームの台本を見て、
俺も覚悟を決めた。決めてしまった。

**「……へ？　ええっ！？　ああっ、ストップストップ！
ズボン脱がなくていいからっ……ちょっと、ねえっ！」**

ベルトを外してズボンを脱ぎ始めたところで、
姉貴が慌てた様子で俺の腕をつかんでくる。

「とりあえず、落ち着こ？　男の人が、そんな簡単に……
見せたら……ダメだってば……」

思わず、また自然と笑みが浮かんでしまう。

昔から姉貴は変わらないなあと、妙なところで安心してしまって。

自分から見せてとせがんできていたのに、
いざ見せようとしたら、こんなことを言うのだから。

「それに……本当に見せてもらえるなら……
きちんと、お姉ちゃんが脱がしてあげたいし……
ほら、雰囲気って大切でしょ？　そういうの……」

「……うぅ～、せっかく忘れようとしてたのに、
また見たくなっちゃったじゃん……」

雰囲気が大切……か。

そんなこと考えもしなかったけど、
姉貴にとっては、大事なプロセスらしい。

たぶん、ズボンを脱がす時も、ヒロインの立場で感情移入して、
やりたいんだろう。

「……ねえ、さっきの本気だったの？　お姉ちゃんに……
おちんちん、見せてくれようとしたの……」

「……うん」

小声で答えて、照れ隠しに頭をかく。

ここまできたら、俺も引き下がれない。

「じゃあ……さ……脱がすところから始めてもいい？
あと、ズボンの上からでいいから触ってみたい……」

「さ、触る？」

「今だけ……お姉ちゃんをカノジョだと思って？
わたしも、恋人っぽくがんばってみるから……」

「いや、カノジョって……触るのはマズいよ、姉貴……っ」

「もぉ、姉貴じゃなくて美咲って呼ぶの。
……いつもの呼び方じゃ、近親相姦になっちゃうでしょ？」

心配するポイントが大いにズレているのだけど、
それも『姉貴だからなあ』で納得できてしまう。
身を寄せて腕に胸を押しつけられると、
それだけで股間が反応してしまった。

「……なんか、めっちゃ照れてるじゃん。
オトナになっても、まだそういうかわいいところ、あったんだ……」

姉貴は、本当に嬉しそうに笑いながら、
腕を組んでくる。

「実際に彼氏を作るなら、そういうピュアな人がいいな……
役者やってる人とか遊んでそうな人が多くて苦手なの」

……俺も、遊び人っぽい男が姉貴の彼氏にはなってほしくない。
というより、他の男に渡したくない……と。
シスコンを拗らせすぎなのはわかってたけど、
そう考えずにはいられなかった。

「……触ってみてもいい？
嫌だったら、我慢しないで言ってね……」

「あ……」

姉貴が臆病な手つきで、俺の下半身に触れてくる。
すでに股間は半勃起状態。
でもそれを笑うことなく、姉貴は興味深そうに、
俺のを何度もさすっていた。

「……ん……んん……あ、すごい……ズボンの上からでも、
おちんちんの形……わかるんだ……」

「……痛くない？　お姉ちゃん、まちがったことしてないよね？」

「あ……自分でもお姉ちゃんって言っちゃった……。
もういっか……近親相姦でも……実際にするわけじゃないし……ね？」

会話が、よく頭に入ってこない。
初めて異性にアソコを触られて、
舞い上がらない童貞なんていないと思う。

「……でも、まだこれって……おっきしてない状態だよね？
おちんちん、おっきくできる……？
お姉ちゃんの手で……おっきしちゃう？」

正確には、半おっき状態だったけれど、
姉貴の囁きや密着の仕方がエッチすぎて、
返答する余裕はなかった。

ズボンの上からでも、触られると気持ちよすぎる……。

「ふふっ、モジモジしてるのかわいい……
このまま、お姉ちゃんにガチ恋させちゃおっかな～」

……なんだろう。

普段、ほとんどボディタッチなんてしてこないのに、
今の姉貴は、俺にべったりだ。

『お姉ちゃんにガチ恋』というのも、他人事とは思えない。

「……ほら……おちんちん、硬くなってきてる……
恥ずかしいね……またお姉ちゃんの目を見られなくなっちゃったね……」

ズボン越しに、何度もアソコの形を確かめるように、
ぎゅっぎゅっと握られて、情けない声が出そうになる。

それを堪えるのに必死で、
完全に俺は、カラダのコントロールを姉貴に奪われていた。

「でもそっか……こういうことなんだ……」

「……こういう、ことって？」

「あ……えっとね、去年ゲームで演じたヒロインが、
主人公のおちんちんを触ってて、
おっきくなってくれると嬉しいって言ってたの」

「お姉ちゃんも、今そんな気持ち……
自分が必要とされてる感じがして……すごくいい……」

ゲームヒロインの感情が理解できたらしく、
姉貴は嬉しそうだ。

……そうだよな、これはあくまで仕事のためなんだ。

とはいえ、この状況で下心を抱かずにいるのは難しい。

「……ちゅっ。ふふっ……かわいいって思ったら、
自然とこういうこともできちゃうんだ……」

……え？

姉貴の顔が限界以上に近付いたかと思うと、
頬にわずかな湿り気を感じた。

突然のことすぎて、状況を把握するのに何秒かかかった。

**「頬っぺたにキスするの嫌だった？
それとも……本気でお姉ちゃんにガチ恋しそう？」**

「や、その……えっ？　ええっ！？」

**「そんなに、キョドらなくても平気だってば……
恥ずかしがってる間に、おちんちんこんなにおっきくなっちゃったよ……？」**

されたの瞬間はわからなかったけど、
あとになって、頬っぺたにやわらかい唇の感触が
残っていることに気付いた。

堪らず、息を呑む。

口紅のＣＭに出てくる女優みたいな、ほどよい厚みのある唇。

そんな姉貴が、ディルドを舐めたり咥えたりして
音を出していたって想像するだけで、
俺には強すぎる刺激だった。

**「……窮屈そうだから、お姉ちゃんがズボン脱がしてあげるね。
少しだけ、お尻……浮かせてくれる？」**

逆らう術もなく、姉貴に尻を持ち上げられてそれに従う。

股間は、もうどうしようもないことになっていた。

**「ん……んしょ……あれ、脱げない……ああっ、どうしよっ。
おちんちん、パンツに引っかかっちゃってるっ……」**

**「ごめんね、ちょっと中に、手……入れさせてもらって……
うん……しょ……えいっ……！」**

ビタン！！！

**「わぁ、びっくりした！？　え、ええっ……おちんちんって、
こんなに勢いよく反り返るの！？
すごい音したよ、ビタン！　って……」**

気がついたら、見るに堪えない惨状（？）。

ズボンの締めつけから解放された俺のペニスは、
言い訳ができないほどのフル勃起状態で反り返っていた。

「……ていうか……これ……めっちゃ、大きくない？
子供の頃に、お風呂で見たのと違いすぎて……
反応に……困るんだけど……」

「……オトナのおちんちんって……こんなに……
すごいんだ……」

あまり意識はしていなかったけど、
一応……人並み以上の大きさはあるのかもしれない。

姉貴が自分の手首の太さと比べたりしていて、
ちょっとだけ、誇らしい気分になった。

「ほら……このディルド、おっきめのを買ったのに……
太さも長さも……負けてない……よね？」

「血管もボコボコ浮き上がってて……すごく……熱い……
ねえ、外見とのギャップすごすぎない？」

「あんなに恥ずかしそうに、モジモジしてたのに……
おちんちんは……さ……こんなに……
オトナというか……グロテスクというか……」

ディルドのグロさも大概だったけど、
やはり実物のインパクトは強烈だったらしい。

「お姉ちゃんの方が年上なのに、なんかかしこまっちゃう……
しばらく見ない間に……こんな風になってたんだ……」

かしこまっている姉貴も、ひたすらにかわいい。

初めてオトナの男性器を見た時の反応は、
俺が今までプレイしてきたどんなエロゲーのヒロインよりも、
初々しくて、そそるものがあった。

「……もしかして、だけど……普通の人より、
おちんちん大きかったりする？
他の人って、どのぐらいの大きさなんだろ……」

……こんなことを考えるのは、おかしいんだろうか。

この先、もし姉貴に恋人ができて、エッチをした時に……

弟の方が大きかったって思ってもらえたら、いいな……なんて。

「……直接、触っても平気？
手が乾いてると、摩擦で痛いかな……」

「あぁ……」

自然と声が洩れる。

ペニスは暴走状態で、すでに俺の制御下にはない。

「ん……んん……あぁ、すご……どうしよ、これ……
お姉ちゃん、手コキしちゃってるんだよね？
弟のおちんちんで……手コキ……」

姉貴の細長い指が、自分のサオに絡みついていくのを見ているだけで興奮する。

こんな気持ちよさを知ってしまったら、もう自慰なんてできなくなる。

「……どうしたの？　さっきから、ぼうっとしちゃって……
お姉ちゃんにおちんちん触られるの気持ちいい？」

俺の反応を愉しんでいるみたいに、指の動きが激しくなっていく。

カラダの力が抜けて、初めてリアルに『腰砕け』という状態を味わった。

動いてもいないのに、呼吸が乱れてくる。

指先で亀頭を摘まれると、もどかしくて、頭がおかしくなりそうだった。

「うん……うん……そっか……顔だけ見てても、
気持ちいいんだろうなあって思ってた……」

「……ちゅっ。じっとしてて……
なんか……もっと、ぼうっとさせたくなっちゃった……」

軽く頬に唇が触れたかと思うと、正面から姉貴の顔が迫ってくる。

「ちゅっ、ちゅっ……ちゅっちゅっちゅっ。
お姉ちゃん、キス魔なのかな……
自分が自分じゃないみたい……不思議な感じ……」

顔中に散らされるキス。

普段の姉貴からは想像できない積極性に、
圧倒されるだけだった。

キスをする時に、唇を少しだけ尖らせてくるのが、
堪らなくかわいい。

自分の姉だということも忘れて、
こんな子がカノジョだったらいいな……と、
本気で思ってしまった。

**「でも……さすがに唇でするのはダメだよね……
興味本位でやっていいことと悪いことがあるし……」**

**「……初めてのキスの相手は弟ですなんて、
ラジオでもネタにできないもん……」**

そんな姉貴の言葉で、はっと我に返る。

初めてのキス。

俺にとっても、そうだった。

でも、たとえここで奪われてしまっても、
後悔はしない気がする。

それどころか、自分で唇を湿らせて、
準備を整えている始末。

姉貴の唇もすごく潤ってて、
見るからに柔らかそうだった。

**「あ……おちんちんの先が濡れてきてる……
ふふっ、お姉ちゃん知ってるよ？　これ、我慢汁って言うんだよね？」**

さすがはエロゲー声優。

処女でもこういう知識は豊富で、
しかも好奇心旺盛だから、色々な触り方を試してくる。

**「わぁ……すごい……どんどん溢れてくる……
でも、これでヌルヌルになったせいで触りやすくなったかも……」**

**「ほら……耳を澄ましてみて？
おちんちんからどんな音してる？
これ……この音……聴こえてるよね？」**

我慢汁をサオや亀頭に塗りつけられ、
頭の芯まで痺れるような快感が駆け抜ける。

次々に天然のローションが生成されて、
水音も派手になっていく。

「ちゅっ……ちゅっ……そのぼうっとしてる顔、好き……
愛おしいって思うの……弟が相手でもこうなんだから、
これが彼氏だったら……どうなっちゃうのかな……」

性器の触り方、扱い方からも、
愛されてる感じが伝わってくる。

と同時に、これを未来の彼氏が味わうのかと思うと、
嫉妬やら悔しさやら、色々な感情が渦巻いていった。

「お姉ちゃん……もしかしたら……すごくエッチなのかも……
もちろん、こういうことには興味あったし……
自分がやりたいから、18禁ゲームの声優にもなったわけだけど……」

「さっきから、おちんちん触ってても全然嫌じゃないの……
むしろ……触るの、好きかもって……」

無性に、姉貴を抱きしめたくなる。

冷静に考えてみて、この世界に何人、
自分の性器を嫌がるどころか、
好きだと言って触ってくれる女の人がいるだろう。

こんな状況で、好意を持つなという方が難しい。

「あ……違うからね？　弟にガチ恋したとかじゃなくてっ……
そういうことでは……ないんだけど……」

「……でも、愛おしいっていう気持ちはほんとだよ？
もう一度、お姉ちゃんの目を見てみて……？」

うっとりと細められた瞳に、
全身の毛穴から我慢汁が噴き出しそうだった。

再び、姉貴の唇が近付いてくる。

「……ちゅっ。頬っぺに、ちゅーは飽きた？」

自分で頷いたのかはわからない。

けれど、俺の様子を見て姉貴はうんうんしていたから、
何らかの反応はしていたんだろう。

「んじゃあ……唇と唇でしてみる？
お姉ちゃんのファーストキス、奪ってみてよ」

「してくれなきゃ……おちんちん、ずうっとこうしちゃうよ」

身を乗り出して笑みを浮かべる姉貴の頬は、
紅く染まっている。

ここまでの過激な発言、積極的な行動は、
何かのゲームのヒロインにでも感情移入した
結果なのかもしれない。

素に戻ったら、間違いなく恥ずかしがるのは姉貴の方だ。

**「お姉ちゃん、最初の時より手コキ上手くなったでしょ？
触ってると、わかるの……
どうやったら男の人が気持ちいいかとか……」**

「うっあ……」

**「どんな風に触れば……ふふっ、今みたいにかわいい声が
出ちゃうかとか……」**

**「……ねえ、キスしてくれないの？　男らしく、お姉ちゃんの
唇、奪ってみてよ」**

**「それとも……このまま、ずうっと手コキしててほしい？
……ツバつけたら、もっと気持ちよくなるかな」**

キスもしたいし、手コキもしててほしい。

そんな贅沢な葛藤の中、姉貴は自分の唾液を指に絡めて、
俺のに塗りたくってくる。

**「……あぁ、すっごい……
さっきより、もっとヌルヌルになって、おちんちん悦んじゃってる……」**

「ああっ、あああぁっ……！」

声を出さずにはいられなかった。

姉貴は何も言わないけど、執拗なまでに亀頭責めをしてくる。

ぐちゅぐちゅと耳にまとわりつく濡れ音に、
際限なく、興奮が高まっていく。

**「ちゅっ、ちゅっ　……いいよ、もっと声だして……
気持ちよくて、どうにかなっちゃいそうなんでしょ？」**

「ど……どうして……わかるの……？」

**「……わかるよ。こうやっておちんちんを触ってるとぉ……
み～んな、わかっちゃうの」**

瞬く間に語彙力が低下して、
『気持ちいい』と『すごい』しか言えなくなる。
何度もイキそうになって姉貴の腕をつかんだけど、
延々と続く亀頭責めの前には無力だった。

「我慢しないで出していいよ？
お姉ちゃんに射精するところ見せてよ。
どうする？　おちんちん、もっと激しくする？」

「～～～っっ」

どのぐらい我慢できれば、早漏だと思われないんだろう。
姉貴の前で少しでも男らしいところを見せたくて、
必死に射精を堪えた。
今の俺にとっては、『長続きする』＝『男らしい』という
認識でしかなかった。

「そんな風に我慢するなら、もっとツバつけちゃう……」

「ほら……すごい音してるね……
もう、おちんちん爆発しそうになってるじゃん……」

姉貴の唇を奪えば、手コキは止まる。
そうすれば、『爆発』しなくて済む。
追いつめられて、自分のことしか考えられなくなっていた。
姉貴に早漏だと思われるぐらいなら――

「いいんだよ、気持ちよくなって……自分のことだけ、
考えればいいの……お姉ちゃんの唇を奪えだなんて、
優しい弟に言うことじゃなかっ――」

「んっん、んん！？　ちゅっ、んんっ……んっ！？
ん、ぢゅっ、はぁっ……んっ、おねえひゃんからもっ、
しゅるっ……ん、ぢゅっ、ちゅっ、はぁ、れろっ、ん、
ちゅっ、ぴちゃ、れろっ……ちゅぅ……」

お互いのファーストキスを交換……と言えば聞こえはいいけど、
結果的には、俺が強引に唇を奪った形になった。
夢中で唇を押しつけたあと、
圧力でひしゃげた口唇の隙間に舌を流し込む。
すると姉貴も負けじと舌を絡めてきて、
その上、狂ったように亀頭責めをし始めた。

「ん、ぢゅっ、はぁ、んんっ……れろっ、ぴちゃ、れろっ……ちゅぅ、んっ、んんっ！？　んっん！？　んんんっ！」

「ううっ！？」

「ぢゅっ、はあっ……待っふぇっ、おひんひんからっ……れちゃってるっ……んっ、ぢゅっ、んっん！？んっん、ぢゅっ、んんっん！？　んんんんっ！？」

プロレス技じゃないけど、
完全に極まったベロチュー手コキ固め。

有無も言わせない快楽の暴力に、
俺はチビるように精液を吐き出した。

姉貴は白濁まみれの手で亀頭を撫でながら、
優しく俺の舌を吸っていく。

「ん、ぢゅっ……ちゅぅ……んん……はぁ……はぁ……ん……は、初めてのキスなのに……激しすぎない？普通、いきなり舌挿れてくる？？？」

思い出すのも恥ずかしい、童貞全開のキス。

姉貴と同じように、俺もエロの知識の大部分が
エロゲーのシナリオからで、
舌を挿れれば、女の子は為すがままになると、
勝手に思ってしまっていた。

その結果が……これだ。

為すがままになるどころか、姉貴は欲情して、
手コキが激しくなっただけだった。

「それに……お姉ちゃんが見てない間に、おちんちんから出しちゃってるし……」

「……射精するところ、見たかったのになあ。しかも……キスだって、完全に不意打ちだったし……」

「……ごめん。怒った？」

「怒ってはないけど、残念だなっていう話」

姉貴は指にまとわりついた精液を見つめながら、
しょんぼりと肩を落とす。

結局、我慢するより、さっさと射精して、
その様子を見せてあげた方がよかったってことか。

……謝らないといけないかな、これは。

「……でもどう？　お姉ちゃんにガチ恋しちゃった？」

「へっ？」

「ふふっ、冗談。　このことは、お母さんたちには内緒だからね？」

ひとりで暗い顔をしていると、目の前で姉貴の笑顔が弾ける。

ガチ恋したかと訊かれて、声が裏返ってしまったのには、苦笑いするしかなかった。

話の間に、姉貴は精液まみれのペニスをティッシュで拭って、キレイにしてくれる。

「……おかげで、明日から今までと違った演技ができそう」

「あと、ラジオでも少しだけ自信が持てそうだし……」

「やっぱり、持つべきは弟だね。ありがと、ちゅっ♪」

ファーストキスよりも、そんな去り際の不意打ちキスの方が、なぜかドキッとした。

姉貴の部屋に取り残されて、急に人肌が恋しくなる。

少し前まで密着していた、やわらかい身体。

肌に残り続ける、姉貴の体温。

すべてが夢だったんじゃないかとさえ思えてくる。

（……俺も一度、洗ってこないとな）

頭ではそう思っても、しばらく動けなかった。

初めての手コキとキス、その余韻が、意識を陽炎のように揺らがしていて。

明日から、いつも通りの日常……というわけには、いかなそうだった。

※トラック３へ